コミュニティ・メディアをめぐる実践研究の地平

―民衆芸術・デザイン・地域社会をキーワードに―

A New Perspective of Practice-based Research for Community Media:
With Folk Art, Design and Local Society as Keywords

鳥海　希世子 *
Kiyoko Toriumi

1. はじめに

「コミュニティ・メディア」とは、コミュニティを基盤に営まれるメディア表現活動を指し、その営みの中心は基本的に一般市民、アマチュアの人びとである。日本の歴史においては戦後以降のミニコミ誌、ケーブルテレビ局の自主放送やパブリックアクセス番組、コミュニティラジオ、さらにはインターネット上の放送局や、ソーシャルメディアを活用した発信活動や情報共有まで幅広くその対象とされる。近年では地震や豪雨など、度重なる自然災害時における役割の再評価から、その活動が取り上げられることも多い（松本，2016；災害とコミュニティラジオ研究会，2014 など）。

このようなコミュニティ・メディアに対する先行研究は、一般の人びとの日常に根ざした市民運動、地域活性化や再生を目指すまちづくりからメディア・リテラシーなどの教育活動まで、幅広いメディア表現の営みをその対象としてきた。研究が盛り上がりを見せる 1990 年代以降、各地の事例に基づく調査研究がその多くを占めるのには、こうした対象の多様性が示されている。しかし一方で、それらの研究は各地の活動を詳らかに把握することには成功してきたものの、コミュニティ・メディアという営み全体を俯瞰的にとらえることには到達できないでいる。また、理論研究や歴史研究においても、その多様性は十分に体系化されていない。

本稿の目的は、まずコミュニティ・メディアをめぐる先行研究を俯瞰的に整理すること。そのうえで、新たな方法論としての「実践研究」について提案することである。具体的には、次章にて先行研究における視座の特徴をアクティビズム、ローカリズム、アマチュアリズムという 3 つの視点に分類し、十分な接続がおこなわれてこなかったアマチュアリズムの領域を補強するものとして、「民衆芸術」の思想と実践について考察する。次に、それら 3 つの先行研究の視座もふまえつつ、これまでの調査や理論、

* 東京大学大学院情報学環
キーワード：コミュニティ・メディア、民衆芸術、デザイン、地域社会、実践研究

歴史をベースとした研究から、実践をベースとした研究のありようについて提案する。それは、コミュニティ・メディアにおける「活動のプロセス」をモデル化した「デザイン」の視座である。最後にそのデザインの枠組みを示したうえで、本論文の成果と課題について総括する。

2. コミュニティ・メディアをめぐる3つの視点

2.1 用語の変遷

コミュニティ・メディアは、これまでメディアやコミュニケーション研究を中心に、社会学や政治学、カルチュラル･スタディーズ、メディア教育や地域研究、コミュニティ組織や政策論など、幅広い分野において論じられてきた。ことメディア研究やコミュニケーション研究において「コミュニティ・メディア」という用語は2000年代半ばから国内外で広く用いられているが、その起源は一般に1960年代から70年代にかけての市民運動の時代に求められてきた。ここで、その歴史を少しだけふり返っておきたい。

1960年代、世界で初めて誕生したラジオの海賊放送は、1960年に北海上からオランダに向けて放送を開始した「ラジオ・ベロニカ」だとされている。1964年には、英国でもイングランド東部のフェリックストー沖から「ラジオ・カロライン」が放送を開始。これら非合法のラジオ局は、ポピュラー音楽番組を中心に若者から絶大な人気を博した。政府は取り締まりに動くが、それらはいたちごっこに終わる。その後、英国の初期人気海賊ラジオパーソナリティは英国放送協会（BBC）に引き抜かれて活躍し、一方イタリアでは1976年に電波の届く距離と聴衆者数を限定したうえで、誰でも放送局を開設することのできる「自由ラジオ」が登場。合法化の流れはフランスやドイツ、米国にも及んでいった。

パリで五月革命が起こる1968年の前年、SONYはPortapakという、その後の携帯型ビデオカメラの代表格となる製品を発売する。ビデオカメラとテープレコーダーのセットからなるPortapakは、それらを1人でも持ち運ぶことができた。外での撮影には重い機材を運ぶのに複数の人手が必要だった時代、Portapakは革新的なメディアとしてプロフェッショナルだけでなく､アマチュアにも普及。機動性が高く、まさしくストリートで撮影をおこなうには最適の最先端技術だった。こうしたメディア技術の進化とも相まって、アクティビストやアーティスト、一般市民によるビデオ制作も活発化、多様な映像作品が作られるようになっていく。

米国では1971年、ボストンの公共放送局WGBHが、平日の毎21時というプライムタイムに市民による企画・制作番組である『キャッチ44』を始めている。ケーブルテレビ網が全土をめぐる米国では翌1972年、放送への市民参加の仕組みとして、アクセスチャンネルの制度化に踏みきる。このチャンネルでは、一定のルールに従い、一般市民が自主的に企画・制作

した番組の放送がおこなわれた。この制度はケーブルテレビを基盤とした「パブリックアクセス」として、欧州や東アジア諸国などの国々に広まっていく（津田・平塚，2006）。

ここでコミュニティ・メディア史の起源の語られ方の特徴として、次の２つを指摘したい。ひとつには、それが主にラジオやテレビという「放送に対する市民参加」という意味合いを強く帯びて位置づけられてきたこと。そしてもうひとつには、グローバルにつながる大きな「社会・市民運動との関係性」のなかでその営みがとらえられてきたことである。

これらのうち特に後者については、現代のコミュニティ・メディア研究にも引き継がれる特徴だ。ソーシャルメディアの普及以降、例えば2010年代前半のオキュパイ・ウォール・ストリートに代表される経済や労働問題、2020年現在のエクスティンクション・リベリオンに代表されるような環境問題など、グローバル化するさまざまなデモや抗議活動の運動は、ストリートとネットワーク上を行き交う新たなコミュニティ・メディアとしてとらえられている（Coban, 2015）。

コミュニティ・メディア研究の現在を考えるためにも、ここで改めて「コミュニティ・メディア」という用語の位置づけについて確認しておこう。なぜなら、コミュニティ・メディアを「コミュニティを基盤に営まれるメディア表現活

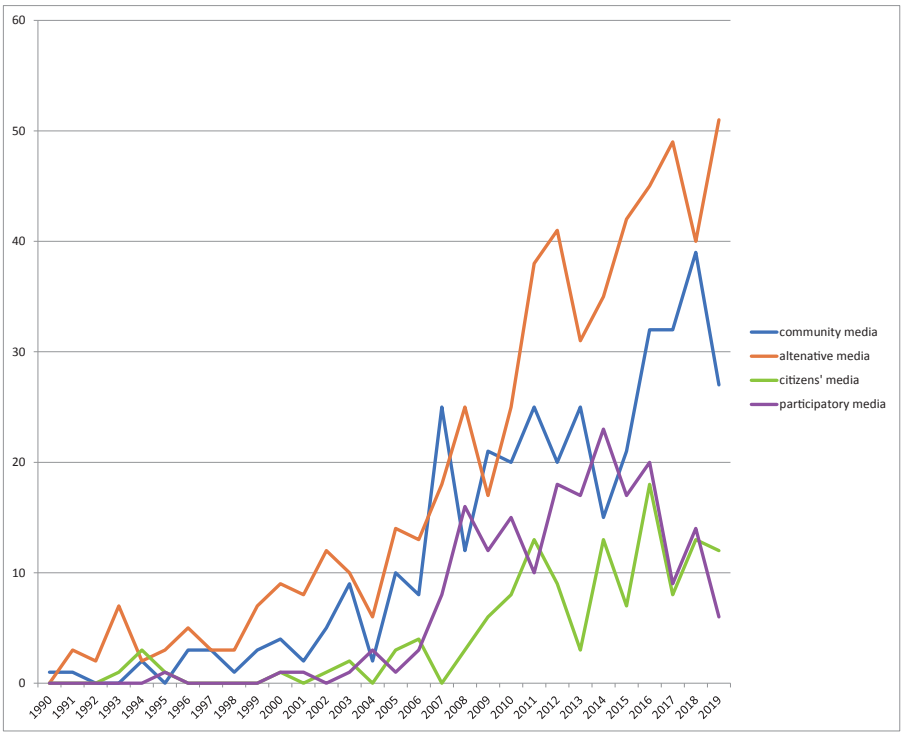

図 2.1.1　コミュニティ・メディア研究における用語の変遷（英語文献）

動」と広くとらえた場合、それらを対象に取り組まれてきた先行研究は、その他にも実にさまざまな呼び名を用いてきたからである。例えば、オルタナティブ･メディア、市民メディア、ラディカル・メディア、アンダーグラウンド・メディア、民衆メディア、インディペンデント・メディア、草の根メディア、参加型メディア等々である。

図 2.1.1 と図 2.1.2 は、これらのうち特に多用されるコミュニティ・メディア、オルタナティブ・メディア、市民メディア、参加型メディアについて、書籍・学術論文・専門誌等のタイトルに登場した回数の 1990 年から 2019 年までの変遷を示している。図 2.1.1 は、主に英語で書かれた研究を、図 2.1.2 は日本語で書かれたものについてのグラフである[1]。

検索したサイトや方法が厳密には異なるため、これらの図は先行研究の動向を大まかに掴むための目安にすぎない。しかし、ここでは 2 つの図から 3 つのことを指摘しておこうと思う。

1 つ目に、2000 年代半ば以降徐々に存在感を増す community media に対し、英語で書かれる研究において依然として最も用いられるのは alternative media であることだ。alternative media という言葉には、1960 年代後半以降、国や地域で支配的であったり、主流であるメディアに対して「もうひとつの・また別の

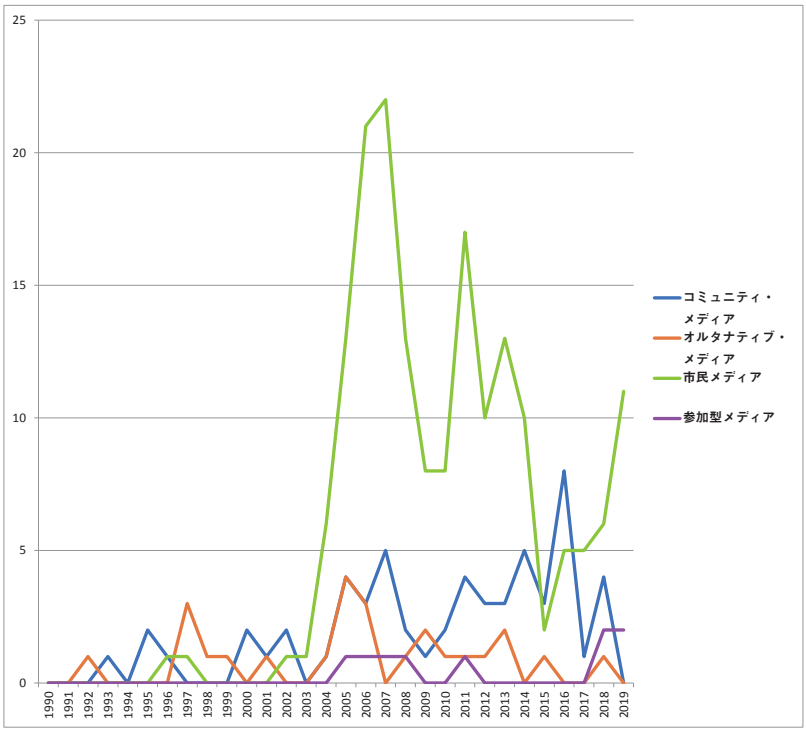

図 2. 1. 2　コミュニティ・メディア研究における用語の変遷（日本語文献）

(alternative)」という対抗の意識が込められてきた。言い換えれば、alternative media は常に主流メディア（特に商業資本や、権力の象徴としてのマスメディア）の対概念として意識され、使用されてきたのである。2000 年代後半以降、その 2 項対立的な図式によって現代のメディア状況を論じることへの限界が指摘されているが（Kenix, 2011 など）、ソーシャルメディアの普及を背景に Alternative Media 研究は今なお拡大していることが分かる[2]。

2 つ目に、community media は 2000 年以降に増え始め、今後も増加することが予想されることである。ここでの「community」には、オンラインのそれではなく、地域的なコミュニティや、物理的「場」への問いかけが含意されている。*Understanding Community Media* の編者であるハウリーは、「文化的な実践や伝統にとって、人びとのアイデンティティと場との関係性はとても密接である」（筆者訳）と指摘し、グローバリゼーションの時代における「場(place)」の再考を唱える（Howley, 2009：9)。経済や情報格差、移民、貧困、高齢化問題などがグローバル化とともに広がり、コミュニティが分断されるなかで、現代における人びとの地域的・集合的な感覚、例えば所属意識や信頼性などは再考される必要があるだろう。増加する Community Media 研究の根底には、こうした問題意識が共有されている。

3 つ目に、一方で日本における研究では「オルタナティブ・メディア」の使用は非常に限定的であり、突出して用いられてきたのは「市民メディア」、その次に「コミュニティ・メディア」であることである。2004 年、日本では全国的な活動の盛り上がりを受け「第 1 回市民メディア全国交流集会」が開催された。同年以降の「市民メディア」論文・記事の急増は、このメルクマール的イベントの影響を少なからず受けていると考えられる。図 2.1.2 では、2010 年代後半に「市民メディア」が上昇しているように見えるが、連載記事を考慮した場合、この上昇は必ずしも研究の増加を表しているわけではない。いずれにしても、用語の変遷からは、日本での研究が英語による研究とは比較的独立したかたちで進められてきたことが見てとれる[3]。

2.2　アクティビズム・ローカリズム・アマチュアリズム

コミュニティ・メディアに対する先行研究をやや大雑把ではあるが整理すると、私はそこに有機的に関連しあう次の 3 つの視点がみられると考えている。すなわち、1 つ目には、その起源の特徴に見られたような、メディアを活用した市民運動として、社会改革の思想と共鳴する「アクティビズム」の視点である。そして 2 つ目には、地域活性化や再生、多文化共生などの取り組みと結びつけられ、特定の地域社会を主な対象とする「ローカリズム」の視点。そして 3 つ目には、テクノロジーに対するマニアックな関心や、趣味や日常的慣習としてのアートや表現をめぐる「アマチュアリズム」の視点である（図 2.2.1)。

1 つ目のアクティビズムは、前述のオルタナティブ・メディア研究や社会運動論、または、市民ジャーナリズム論のなかに特にみることができる。具体的なオルタナティブ・メディアに

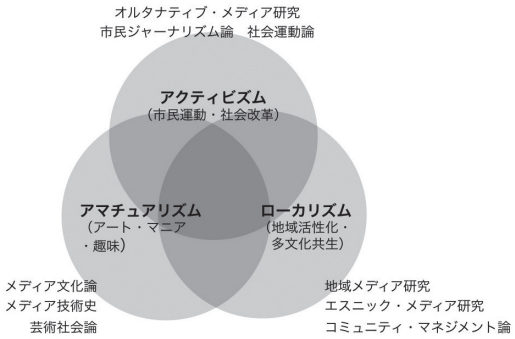

図 2.2.1　コミュニティ・メディア研究をめぐる視点①

は、湾岸戦争の際に米国の主流メディアがこぞって賛同するなか、パブリックアクセス番組を通して反戦運動のようすを放送した「ペーパータイガー TV」や、東京電力福島第一原発事故以降、「東電テレビ会議映像」を編集し[4]、市民とともに震災と事故、日々の記録をとり続ける「Our Planet TV」などが思い起こされる。アクティビズムの視点が重視するのは、優れたオルタナティブ・メディアが発信するジャーナリズム運動であり、その実践をもって提起される強かな批判精神である[5]。

2つ目のローカリズムは、特にコミュニティ・メディアを含む地域メディア研究やエスニック・メディア研究、またコミュニティ・マネジメント論のなかにみられる視点である。非営利組織として運営されることの多いコミュニティ・メディアには、有償の運営スタッフからボランティア、アーティストやジャーナリストまで、多様な人びとが関わる。これまでの調査研究の多くは、こうした「人」に着目し、運営の実態をレポートしてきた。また運営の観点からは、自治体や学校、美術館や他のコミュニティ組織などとの連携のありようも照射される。ローカリズムとは、地域社会の歴史文化やそれらを構成するさまざまな主体とのダイナミックな関係性のなかにコミュニティ・メディアのあり方をとらえる視座である。

1960 年代後半から 70 年代にかけてカナダでは、国立映画委員会によって「変革への挑戦」プロジェクトが進められた。いち早く携帯型ビデオカメラを取り入れ、ドキュメンタリー映像の制作を通して地域住民のあいだに対話を生み出そうと試みた、参加型プロジェクトのパイオニアとして知られている（Waugh, Baker & Winton, 2010）。多民族社会におけるコミュニケーションを支え、エンパワーメントすることを目指した点ではローカルなアクティビズムの要素を有する事例といえる。ただし、ここでは上映会を通して地域コミュニティの課題を共有し、行動に結びつけることを試みた点で、ローカリズムの視点の強い実践として示しておきたい。

一方で日本では、初めて独自のパブリックアクセスチャンネルを設けた鳥取県の「中海テレビ」や、阪神淡路大震災を契機に設立された多言語ラジオ局「FM わぃわぃ」など、地域の歴史やその文脈から誕生するコミュニティ・メディアの活躍が目立っている。そのルーツには、同人誌やミニコミ誌、1960 年代に始まる難視聴地域のケーブルテレビを利用した自主放送などがあげられよう（児島・宮崎，1998）。このように日本のコミュニティ・メディアをふり返ると、歴史的にローカリズムの視点を生み出す素地が強いことが分かる。

Community Media 研究の広がりに見たように、グローバル化の進む現代社会において地域の様相は変容し、「ローカル」の見直しが始まっている。地域のさまざまな主体が連携し、コミュニケーション回路を見出そうとする試みは、コミュニティを再生しようと考える世界各地の自治体やコミュニティ組織、アート・プロジェクトなどによっても取り組まれていよう。コミュニティ・メディアが連綿と受け継ぐこの「ローカリズム」の視点と実践は、文化や背景、意見の異なる人びとを媒介する知恵と技法の蓄積として、今後も再考される余地があると考えている。

最後に、アマチュアリズムの視点である。この視点は、コミュニティ・メディア研究のなかで最も論じられ難く、アクティビズムやローカリズムに比べて十分な議論が蓄積されていない領域である。

私はここで、「アマチュアリズム」に複数の意味を持たせている。1 つ目は、芸術家だけでなくコミュニティとともに、もしくはコミュニティが主体となって展開されるようなアート活動の要素である。2 つ目は、カメラやオーディオ機器、かつてのパソコン通信などのメディアや情報技術をめぐるマニアックな関心やその活動の要素だ。3 つ目に、日常的な趣味としての要素である。

1960 年代のコミュニティ・アートについて論じた研究（Mckay, 2009）や、自由ラジオやアマチュア無線家に関する研究（粉川，1983）などの一部を除き、アマチュアリズムの視点を持つ多くの研究は、これまで十分にコミュニティ・メディア研究として位置づけられてこなかった。しかし、スマートフォンさえあれば画像加工も映像編集も、それらをソーシャルメディアに乗せて共有することも容易にできるようになった今、このアマチュアリズムの領域はますます広がっていくことが予想される。既におこなわれている研究との接続も含め、コミュニティ・メディア研究における位置づけや検討が求められていよう。

本節では、コミュニティ・メディアに対する先行研究をアクティビズム・ローカリズム・アマチュアリズムの 3 つの視点に分けながら考察した。しかし当然ながら、これら 3 つの視点は完全に分離したものではなく、それぞれの研究によって割合を変えながら融合している場合の方がむしろ多い。市民ジャーナリズム論にもローカルな視点はあり、メディア技術史のなかにも運動の要素はある。しかし全体として指摘したいのは、他の 2 つに対して立ち後れている、アマチュアリズムをめぐる研究視座を補強していくことの必要性である。

3. 民衆芸術の思想と実践

3.1 「民芸」の創造に対する思想

私はかつて、コミュニティ・メディアを「コミュニティを基盤に営まれるメディア表現活動」ととらえたうえで、一般の人びとによる創作と学びに関する営みの系譜を日本、広くは東アジアの歴史のなかに求める試みをおこなった（鳥海，2013：71-105）。本章ではその試みのなかから、アマチュアリズムの視点のひとつとして、民衆芸術の思想と実践について論じていく。

コミュニティ・メディアにつながる一般の人びとによる創作と学びをめぐる歴史をふり返るために、私は日本における2つの時代区分に着目した。ひとつは、大正デモクラシーや社会主義の気運の高まりを背景に、農民芸術運動などが数多く起こされた1920年代。もうひとつは、戦後民主主義が広まるなか、生活記録運動や歌ごえ運動のほか、新たなサークル運動が全国的に開花した1950年代である。このなかから、本章では、1920年代に始まった柳宗悦らによる民芸運動について考察していきたい。

1926年、民芸運動は思想家の柳宗悦、陶芸家の浜田庄司、河井寛次郎らによって「日本民藝美術館設立趣意書」の発行によって開始された。柳らは、芸術を美術館や劇場にだけでなく、日常の暮らしのなかにもあるものとしてとらえた。なかでも日々使われる日用品には実用的な美しさがあり、それを「雑器の美」や「用の美」と呼び、無名の職人たちによる手仕事の技術を再評価する。

「民藝（以下、民芸）」とは、民衆的工芸の略である。民芸運動は、当時の近代美術がまとっていた権威性やプロフェッショナリズム、そして大量生産型の広がる物づくりのあり方に対抗した芸術社会運動であった。

私がこの運動に関心を持ったのは、それが新たな芸術のありようを提唱する単なる思想運動であったのではなく、国内外の地域社会におけるコミュニティ実践をともなっていたからである。そして、その実践では新たな「民芸」の協働的創造が目指されていた。すなわち、民芸とは職人や芸術家、地域住民らによるコミュニティによって生み出される、暮らしのなかの芸術とされていたのである。

コミュニティ・メディアが人びとの日常的な表現活動である場合、それは民芸の思想に照らせば、暮らしにおける民衆芸術的な営みとしてとらえることができる。哲学者の鶴見俊輔のいう、生活とも見え、芸術とも見える「限界芸術」と言ってもよい（鶴見，1967）。この民芸としてのコミュニティ・メディアを、では具体的な社会実践としてどのように枠組みづけることができるだろうか。そのヒントを探るため、民芸運動の思想から、その実践がどのようにとらえられていたのかをコミュニティ・メディアの営みに引きつけながらみてみたい。

図3.1.1は、1936年に柳宗悦が発表した「民芸の流行」（柳，1936）という論考をもとに、「民芸」の創造に対して必要な、柳の言葉を借りれば「精進すべき」活動について私が図としてまとめたものである。柳宗悦はこの論考のなかで

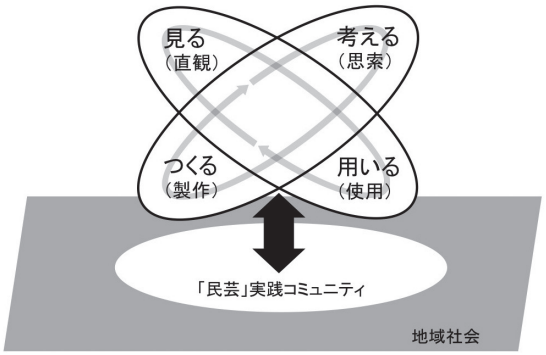

図 3.1.1　民芸／コミュニティ・メディアの創造に対する枠組み

図を描いていない。そのため、これは私のコミュニティ・メディアへの関心に即して描いたものであり、「民芸」の創造だけでなく、コミュニティ・メディアの創造にも通じる枠組みとして位置づけている。そのため、タイトルは「民芸／コミュニティ・メディアの創造に対する枠組み」としている。

「民芸の流行」は、民芸運動の立ち上げから10年、民芸品の蒐集や展示会、講演会や民藝館の設立などに各地を飛びまわるなかで、「民芸」という言葉の誤った広まりを感じた柳宗悦が、民芸とは何かについて改めて社会へ問いかける目的で書かれたものである。

柳は「民芸に対して精進すべき事柄」として、次の3つを主張する。すなわち、民芸を見ること・考えること・つくることである。「むづかしくいえば直観と思索と製作」だという（柳, 1982：454）。この論考を書いたとき、柳の念頭にあったのは職人や作家などだったのかもしれない。しかし民芸運動は、民芸の創造には一般の人びとも参加し得ることを説いてきた。そのためここに、「用の美」としてくり返し主張されてきた「用いること（使用）」を加えたいと思う。

すなわち、「見る（直観）・考える（思索）・つくる（製作）・用いる（使用）」という4つを、ここでは民芸／コミュニティ・メディアの創造に対する4つの「活動」として位置づけることにする。これらの活動のうち「見ること（直観）」とは、普段使いの日用品として用いやすく、愛着を持て、価格も手頃なものを選び抜く、民芸に対する審美眼のこと。「用いる（使用）」とは、日々の生活のなかで実際に使われることを指している。「用の美」とは、いかに職人の高い技術によって生み出された優れた器でも、家の棚の奥でほこりをかぶっていては美しいとは言えない、日常において用いられてこそ成立する美しさであるとされていた。

民芸とは、これら4つの活動が相互に影響しあい、混ざり合うなかで創造されると考えられていた。そして4つの活動のうち、職人や芸術家には全てに関わりつつも、特に「考える・つ

くる」の役割を、一般の人びとには「見る・用いる」への参加を求め、これらの活動が実際に暮らしのなかで実践されることで、その美しさは高められると考えていた。

さらに民芸運動では、4つの活動を通して新たな「民芸」を創造するためには、それを実践する職人と地域住民、芸術家らによるコミュニティが必要であるとも考えていた。民芸運動の言葉を借りれば、職人を中心とした「ギルド」的な集団を各地に誕生させることが、「民芸」という思想と実践を国内外に広めていく戦略でもあったのである。図3.1.1では、それを「「民芸」実践コミュニティ」と表している。

また、その「「民芸」実践コミュニティ」は、「活動」から生まれるとともに、より広い「地域社会」の文脈のなかに位置づけられながら形成される。図3.1.1は、これら3つの位相、つまり「活動・「民芸」実践コミュニティ・地域社会」から構成される。

少し早足で「民芸／コミュニティ・メディアの創造に対する枠組み」について説明してしまったが、問題はここからである。ではこうした思想が、実際の「民芸」実践コミュニティにどうつながり、新たな民芸の創造がおこなわれたのか。初期の民芸運動の過程をふり返ってみると、その思想や中心的「同人」と呼ばれる思想家や芸術家たちが、初めは各地域社会の習慣やしがらみのなかで苦戦するようすがわかってくる。「よそ者」である彼らに対して一体なにをやりたいのか、怪しいことをしているのではないかと噂がたち、近所から警戒され、土地の有力者から反発を受ける。美しい思想を語る一方で、その実践はそう容易には進まなかったのである。

次節では、民芸としての「益子焼」を例に、その具体例を考察する。しかしここで議論を先取りすれば、歴史を掘り起こして分かるのは、思想と運動の融合、もしくは「民芸」実践コミュニティの誕生を促すのは、民芸運動の同人たちというよりも、土地の歴史に染み込んだ作法や考え方にしばられず、新たな可能性をその思想に見出すことのできた地域の人びとであった、ということだ[6]。そうした地域の人びととのあいだに生み出される関係性こそが、その後の運動の広がりを促す素地となるのである。

3.2 「益子焼」をめぐる実践

栃木県の南東部に位置する芳賀郡益子町は、「益子焼」の産地として知られる日本有数の「やきものの里」である。湯のみや茶碗など、シンプルでありながら手作りの温もりがあり、かつ最近ではモダンなイメージを「益子焼」に持つ人もいるだろう。群馬県の横川駅(JR信越本線)の有名な駅弁「峠の釜めし」を思い起こす人もいるかもしれない。主に山地と丘陵地から成る自然豊かな町であり、2019年の人口は約2万2000人。そこへ1966年から続く春と秋に実施される「陶器市」には、あわせて60万人もの人が集う。

この益子に1924年、民芸の思想を胸に移住したのが浜田庄司（1894～1978年）である。柳宗悦の相棒ともいえる運動の中心人物の一人であり、民芸としての「益子焼」誕生とその発

展の立役者として知られる陶芸家だ。1955年には、第1回重要無形文化財技術保持者（人間国宝）に富本憲吉（同じく民芸運動同人）らとともに認定され、1968年には文化勲章を受けた人物でもある。東京や沖縄、また海外へ赴く機会も多かったものの、1924年の移住から生涯にわたり益子に暮らし、作陶の拠点とした。

本節では、図3.1.1「民芸／コミュニティ・メディアの創造に対する枠組み」にそって、益子における民芸運動をふり返る。ここで歴史の詳細にはふれないが、「民芸」としての益子焼が誕生するまでの過程において注目すべきポイントは、次の3点であると考えている。

1つ目は、益子での民芸運動における「活動」は、浜田庄司と若手陶工との交流から始まったことである。保守的な風土の残る益子において、浜田は異質な存在として迎えられた。現在の神奈川県川崎市生まれ、東京育ちの浜田には、益子の方言が伝わらない。また、益子の前には英国に住んでいた浜田庄司、その持ち物には見慣れぬ怪しい英語の文字が書かれていた。町の人びとが怪訝な目を向けることも想像ができよう。「浜田先生がはじめて益子へきた時は、人柄がわかんねえから、どうもきちげえ（気違い）みたいな人が毎日毎日歩いているって、町中で噂したもんだ」（清水，1973：27-28）と語るのは、当時の若手陶工の一人、見目喜一郎である。

この見目喜一郎、および佐久間藤太郎という当時20代の若手陶工こそ、その後、浜田庄司のつくるやきものや、蒐集された民芸品に魅せられ、民芸・益子焼の素地をつくっていく人物である。仕事を終えた夜から夜中にかけて浜田と3人で集まっては、夜な夜な議論や試作を続けたという。浜田庄司が移住した頃の益子の窯業は、貧しく不安定な時代であった。見目や佐久間がここから出来あがった新作によって経済的な安定を得るまでに、浜田庄司との交流が始まってから、少なくとも10年の歳月が流れることになる。

見目と佐久間との議論において、浜田がどれほど民芸運動の思想について語ったかの詳細は明らかではない。しかし、ここでの3人の活動を図3.1.1に照らせば、それは「考える･つくる」の往復としてとらえることができる。一方で、見目喜一郎と佐久間藤太郎にとって浜田のつくるやきものや、国内外で蒐集された民芸品は、新作開発のうえでの参考であり見本、目標であったはずである。これらのモノに実際にふれることによって、自然と「見る」素養も身につけていったと考えられる。

2つ目は、見目や佐久間による新作の販売が少しずつ軌道に乗り始めた1930年代半ば以降、浜田によってより多くの職人たちを巻き込む「「民芸」実践コミュニティ」づくりへの挑戦が実行されていたことである。ひとつは、1937年から翌年にかけて、益子の藍染業者や鍛冶屋、家具・木工師、荷鞄造り、竹籠・簾（すだれ）などの職人に声をかけ、何度か開催されていたもの。もうひとつは、戦後の1952年に「民芸」という言葉を店名に掲げた益子で初めての民芸販売店「民芸店ましこ」を開店する前に実施されていた、益子の複数の窯元との話し合いの場である[7]。

前者は、その後メンバーの招集や軍事徴用のために立ち消えになってしまったというが、浜

田は戦後にも同様の構想を持ち続けていたとされている（萬木，1997）。「民芸店ましこ」には開店当初、浜田が益子の窯元をめぐり、選ばれた商品のみが販売されていた。開店前に開いていたとされる話し合いの場では、「民芸店ましこ」を開店させるうえでの浜田なりの思想や戦略が共有されていたと考えられる。この店の位置づけ、商品を浜田がどのように選んでいるのか、各窯元がどのように関わるのか等である。

図 3.1.1 の枠組みに即していえば、これら「民芸」実践コミュニティの試みはどちらも複数の職人が集まり、共に「考える」場を目指していたといえる。見目・佐久間との活動と異なるのは、ここでの「つくる」には浜田は直接関与していないことだ。「民芸店ましこ」には、浜田庄司の作品は置かれていない。ただし、浜田が益子の窯元をめぐり、よいと思う品を「見る」（選んで店に並べる）行為は、集まった職人たちにも「民芸」とは何かを考えさせ、自らの「見る」や「つくる」素養へのふり返りを促したことだろう。

3 つ目に、民芸・益子焼の動きが「地域社会」へ広まる流れには、より組織的な企てが影響していたことである。そのひとつに、1937 年、独立窯の後継者 12 名による「十二年会」という組織の結成があげられる。これは、益子の窯元たちが初めてつくった共同組織であった。見目喜一郎と佐久間藤太郎も、その 12 名に名を連ねている。

家族経営の小さな窯元が多い益子において、明治時代から彼ら・彼女らを苦しめていたものに「仲買人」という制度があった。当時の品物の流通経路は、窯元から仲買人、そこから東京または他の地域の小売店、そして消費者に届くというもの。消費者の手に届く品物の値段は、窯元の卸値の約 5 割増しであったという。仲買人の多くは資産家で、窯元から品物を安く買い叩いては、資本のない窯元に資金を貸し付けることによって支配力を強めていたのである。

「十二年会」は、この「仲買人」へ対抗するために結成され、後に「益子陶器工業組合」へ、そして戦時中に政府の指針によって統制会社となり、仲買人の権力からついに開放されることになる。益子の窯業を長らく苦しめてきた「仲買人」制度に抗った「十二年会」は、組織や流通経路のあり方等、窯業を支える大きなしくみを改革する流れとなったのである。「十二年会」結成に始まるこの一連の歴史は、より広い益子の「地域社会」へと民芸運動が拡大する過程における、重要な流れのひとつと言えるだろう。

図 3.1.1 の枠組みは、柳宗悦の民芸の創造に対する思想を、コミュニティ・メディアの営みに結びつけつつ図式化したものであった。本節では「活動・「民芸」実践コミュニティ・地域社会」に即して益子での実践をふり返ったが、これをコミュニティ・メディア実践に対する枠組みとする場合の修正点も明らかになったと考えている。

特に「活動」に関しては変更を加える必要がある。「見る・考える・つくる・用いる」は、個別の活動要素として考えるためには役に立つが、全体の関係性をとらえる枠組みとしては難しい側面がある。浜田庄司や職人等、主体によって関わる要素やその構成が異なるためでもあるだろう。そのため、この「活動」については時間的な流れにそって当てはめられるかたちに更

新したい。「活動」から生まれる実践コミュニティや、地域社会への広がりを組み込むためにも、その方がコミュニティ・メディア実践に即していると考えている。

4. コミュニティ・メディアの実践研究

4.1　実践者としての研究者

日常的なツールとなったソーシャルメディア、また人工知能やAR（拡張現実）などの最先端技術やそれらを取り巻く社会状況は、今後も私たちのコミュニケーション環境に変化をもたらすとされている。情報技術をめぐる問題は、いまやグローバル化する経済問題や政治問題とも直接的に結びつく。

そうしたなかで、コミュニティ・メディアに対するアクティビズム･ローカリズム･アマチュアリズムという枠組みは、研究の視点としても実態としても、なおいっそうその境目が曖昧になっていくことが予想される。図2.2.1の3つの円は静止し、定まったサイズの円ではなく、時代や活動によって流動的に大きさを変えながら、互いに影響を及ぼし合うものとしてとらえた方がよいだろう。

先行研究においてもこれら3つの視点は混ざり合いながら、その方法論として活動を実態的にレポートする調査研究、アクティビズムの視点が多くみられる理論研究、また3つの視点それぞれにみられる歴史研究が用いられてきた。それらに対して、ここで提案するのは実践研究であり、そのデザインの視座である。益子の民芸運動にみたような、地域社会のなかで思想と実践との往復を試みるような視座といってもよい。境目の曖昧になるアクティビズム・ローカリズム・アマチュアリズムの全体を俯瞰的に眺めつつ、コミュニティ・メディアの新たなかたちを実践的・実験的に創作していく方法論である。

オルタナティブ・メディア研究を代表する著作のひとつに、コロンビアのアンデス地方で1980年代からビデオ・ドキュメンタリーの制作に関わった、クレメンシア・ロドリゲスによる *Fissures in the Mediascape* がある。彼女はそのなかで、自身の実践経験をふり返りながら次のように述べている。「これら全ての経験を概念化しようとするとき、私自身が切り離されてしまっていることに気づく。私はそのとき、私たちコミュニケーション研究者がオルタナティブ・コミュニケーションやメディアを探求し、理解するために用いる理論的枠組みや概念が、その実態とは異なる領域にあること理解したのである。私たちの理論化の範疇は、オルタナティブ・メディアに関わる者の生きた経験をとらえるには限定されすぎている（筆者訳）」(Rodriguez, 2001：3)。

実践の経験を研究としてまとめることの困難さ。その豊かな実態の一方で、研究という型のなかにおさまったコミュニティ・メディアの魅力は乏しく、狭められてしまっている。このロドリゲスの指摘からは、2つのことが言えると考えている。ひとつは、少なくとも2001年の時点で、このようなコミュニティ・メディアを

めぐる研究と実態とのずれが指摘されていたこと。そしてもうひとつは、コミュニティ・メディア研究者らの実践者としての側面が見落とされてきたことである。

ロドリゲスのように、コミュニティ・メディア研究全体において、その研究者のなかには、コミュニティ・メディアやマスメディアなどの現場での経験を持つものが少なくない。日本の「市民メディア」研究を牽引してきた研究者らもまたしかりである。そして、かく言う私も2002年から2015年にかけて、地域住民によるインターネット放送局の運営に携わっていた[8]。このような実践者としての研究者の、経験に裏打ちされた実践知ともいえる素養は、しかし、コミュニティ・メディア研究のなかで十分に活かされてきていない。

研究とは、伝統的に客観的で分析的なものであるとされてきた。ロドリゲスの指摘のように、コミュニティ・メディアの研究もまた、対象を外側から眺め、観察し、理論的な枠組みや概念を巧みに用いて分析しようと試みてきた。しかし、それらを担ってきた研究者の多くは、同時に実践家でもあったのだ。そう考えたとき、彼ら・彼女らが研究対象としてのコミュニティ・メディアを見る視点は、外側から観察するというものだけでなく、内側を知り、関わり、主体的に意見することもできるものであった。しかし、このコミュニティ・メディア研究の多くが潜在的に有してきた、研究対象に対する内在的な視座は、「研究」の視点として扱われてこなかったのである。

コミュニティ・メディアの実践研究とは、対象に研究者が積極的に参加し、外側だけでなくその内側からみえる景色と感覚を「研究」のなかにおさめ、さらにそれらを通して新たなコミュニティ・メディアのありようを未来に向けてデザインしていこうとする試みである。つまり、研究対象の「中」に参加しながら感じることと、「外」から眺めて思うこととを往復する思考のなかで、新たなコミュニティ・メディアを社会実践として企画、運営し、実践者としての内在的（ときに主観的）な視点をも取り入れながら、研究としてまとめること。そうしたややアクロバティックで複眼的な研究方法のことを指している。それを、ここでは実践研究における「デザイン」の視点と呼んでおきたい（図4.1.1）。

メディア研究全体に目を移せば、2000年代以降、環境のごとく社会を包むメディアや情報技術を研究対象として客観的・傍観者的に分析することの限界はすでに指摘され、研究対象に介入し、デザインする実践研究の可能性は論じられている（水越・吉見, 2003）。なかでもメディアの実践研究を牽引してきたのは、メディア・リテラシーの分野であろう。コンテンツの批判的な読み解きだけでなく、新しいメディアのありようについて実践を通して考え、表現、創造していく活動がおこなわれてきたためである。それらの実践研究は、メディア教育に関わる研究者と、学校教育や社会教育、美術館や博物館、コミュニティ・メディアやメディア産業などに属する実践家との協働のなかで進められてきた（水越伸・東京大学情報学環メルプロジェクト編，2009）。

メディアやコミュニケーションをめぐる実践研究の方法論や理論は、まだ十分に体系化され

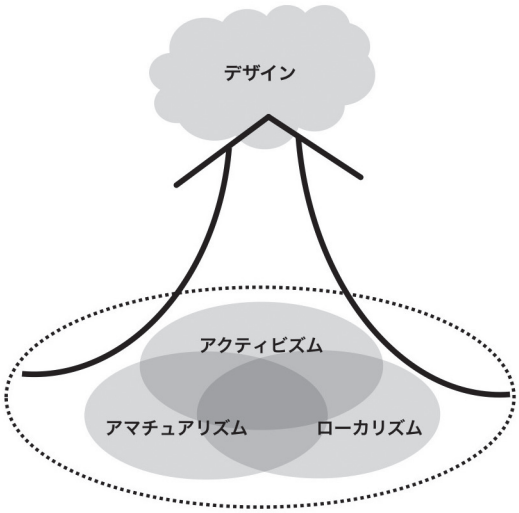

図 4.1.1　コミュニティ・メディア研究をめぐる視点②

ていない。メディア・リテラシーだけでなく、コミュニティにおける参加型デザインやアクション・リサーチ、創作活動を含む実践をベースとしたその他の分野の知見も批判的に受け継いでいく必要もあるだろう。そのうえで、対象に対する内在的な学びのありようを組み込んだ実践研究に取り組んでいきたい。そこにコミュニティ・メディア研究の新たな可能性があると考えているためである。

4.2　デザインの枠組み：創作・合評・公開

最後に本節では、前章の「民芸／コミュニティ・メディアの創造に対する枠組み」(図 3.1.1) の考察につなげながら、それを発展させた「コミュニティ・メディアの創造に対するデザインの枠組み」(図 4.2.1) について説明していきたい。

コミュニティ・メディアの実践研究においては、そのデザインの対象を活動のプロセスとしていきたいと思う。図 4.2.1 は、先の「民芸／コミュニティ・メディアの創造に対する枠組み」への考察をもとに、「批判的メディア実践」(水越，2011) 等のメディアの実践研究からの知見や、『経験としての芸術』のなかでジョン・デューイが日々の活動プロセスそのものが芸術であると論じた「プロセスとしてのアート」(デューイ，1934=2003) 等もふまえながら、コミュニティ・メディアの営みに即して描いたものである (鳥海，2013)。

この図は、大きく「活動・メディア実践コミュニティ・地域社会」という 3 つの位相によって構成されている。さらに「活動」は、「創作・合評・公開」という 3 つの要素から成る。「創作」とは、記事や番組を個人やグループで制作する

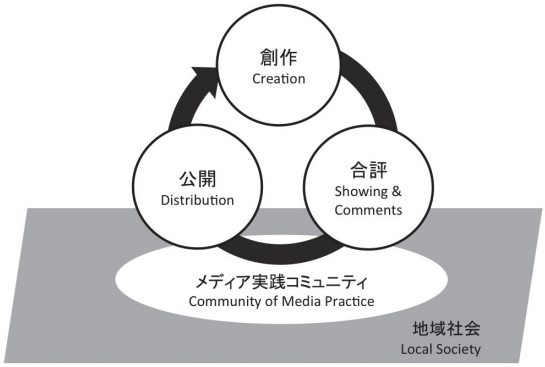

図 4.2.1　コミュニティ・メディアの創造に対するデザインの枠組み

活動である。「合評」は、編集会議や上映会などでつくったものを共有したり、意見を交換する活動だ。そして「公開」は、完成した作品や番組をインターネットや放送、紙面、ミュージアムやギャラリーの展示などを通して発表したり、流通させる段階の活動のことを指している。「創作・合評・公開」は、コミュニティ・メディアの基本的活動を示したものだ。これらは個別の活動というよりも、循環的なプロセスとして位置づけられている。

「創作・合評・公開」による活動プロセスを通して、コミュニティ・メディアは多様な実践コミュニティを生み出す。ここでいう実践コミュニティとは、エティエンヌ・ウェンガーらのいう特定の問題や専門性によって生まれる「Community of Practice」（ウェンガー、マクダーモット、スナイダー，2002）よりもずっと多様でゆるやかな集まりである。メディア表現を通して知り合い、対話し、学び合うコミュニティである。ここではそれを、「メディア実践コミュニティ」と呼ぶことにする。

コミュニティ・メディア研究をめぐるアクティビズム・ローカリズム・アマチュアリズムの議論に立ち返れば、ここでは特に、近年再考されるローカリズムと、今後さらに広がることが予想されるアマチュアリズムの視点に依拠しつつ、「地域社会」における「メディア実践コミュニティ」について考えていきたいと思っている。この地域社会のとらえ方に関しては、南カルフォルニア大学のサンドラ・B・ロキーチらが、1998 年よりロサンゼルスで取り組むプロジェクトから実証された「コミュニケーション・インフラストラクチャー理論」（Ball-Rokeach, Kim & Matei, 2001；Kim, Matsaganis, Wilkin & Jung, 2018）を参照したい。

ロキーチらの研究は、社会調査の方法論にもとづく実証研究である。大学院での授業や研究プロジェクトを通して、移民がそのコミュニティの大半を占めるロサンゼルスにおいて、20 年以上に渡って継続的な調査をおこなっている。そして、そこには NPO をはじめとする地域組織や住民個人との密接な関係性が構築され

ている。

かつてフランスの社会学者、エドガール・モランは、調査とは研究者にとってはもちろんのこと、被調査者にとっても役に立つものでなければないとして、それを「交換の義務」(モラン, 1967=1975) と呼んだ。コミュニティ・メディアの実践研究も同じように、それが研究者の学びの場になるのと同時に、地域の人びとにとっても役に立ち、楽しく、気づきの多い学びあいの場になる必要がある。実践研究における「デザイン」の視点とは、そうした研究者と地域社会の人びとが互いに学び合い、関係性を構築するプロセスのなかに位置づけられる必要があるだろう。

5. おわりに

本論文は、コミュニティ・メディアに関する先行研究を俯瞰的に整理すること、および新たな方法論としての実践研究の提案を目的としていた。そのうえで、2章では先行研究における用語の変遷をふり返り、これまでの調査・理論・歴史研究における視点をアクティビズム・ローカリズム・アマチュアリズムの3つに分類した。

3章では、アマチュアリズムに関する議論を補強するものとして、民衆芸術の思想と実践について考察した。なかでも1920年代に起こされた日本の民芸運動に着目し、柳宗悦の「民芸の創造」に対する思想を、コミュニティ・メディアのそれに置き換えながら図式化した。そのうえで、浜田庄司と益子における民芸運動の実践を手がかりに、思想がどのように具現化されたかについて考察した。

4章では、アクティビズム・ローカリズム・アマチュアリズムによる先行研究の視座全体を俯瞰的に引き継ぎながら、実践研究を方法論とする「デザイン」の視座について提案した。

十分とは言えないが、本論文の成果として次の3点をあげておきたい。まず、先行研究を「アクティビズム・ローカリズム・アマチュアリズム」という3つの視点によって整理したことである。次に、それらに対して実践研究を方法論とする「デザイン」の視座を提案したこと。そして最後に、民衆芸術の歴史がアマリュアリズムの視点を補強するコミュニティ・メディアの先行研究として、また先行実践として位置づけられることを明らかにした点である。

一方で、課題として次の2点をあげておきたい。ひとつには、デザインや実践研究のありようについては、今後より体系化された議論をおこなう必要があることである。そのためには、コミュニティ・メディアに限らず、広義のデザインや実践研究に関する先行研究との接続が必要であろう。もうひとつは、コミュニティ・メディアとソーシャルメディアとの関係性についての考察が十分におこなえなかったことである。

4章でふれたように、情報技術のさらなる進化やそれを取り巻く社会の状況によって、コミュニティ・メディアのあり方はこれからも変容する。例えばコミュニティFM局が電波による放送をやめ、インターネット上での配信に

切り替えたり、YouTube でパーソナリティの話すようすを同時に動画配信するようになるのは自然な流れともいえよう。さまざまなソーシャルメディアを活用した表現活動のどこからどこまでがコミュニティ・メディアということになるのだろうか。

それについて考えるために、少しだけ図 2.1.1 と図 2.1.2 に立ち返ってデータを示したい。図 2.1.1 において、「Social Media」の件数は 2010 年に 1000 本を超え、その後 2019 年まで約 1000 本ずつ増加し続けている（2019 年の数は、9810 本である）。一方「ソーシャルメディア」では、2011 年の 372 本をピークに減少傾向にある[9]。日本語文献における減少傾向は興味深いが、いずれにしても、これらの数値は図 2.1.1 と図 2.1.2 で扱った用語とは、日本語では 1 桁、英語文献に至っては 2 桁の違いがあるということになる。

もちろん、これらの全てがコミュニティ・メディアの研究として位置づけられるわけではないだろう。しかし、多様な分野においてソーシャルメディアを対象とした研究が大きな潮流となっていることは間違いない。コミュニティ・メディアは、これからもソーシャルメディアを含む複数のテクノロジーを積極的に組み合わせながら（もちろん紙媒体などのアナログメディアも活用しながら）その営みをデザインしていく。アクティビズム・ローカリズム・アマチュアリズム、そしてデザインの視点から、今後この大きく広がるテーマとの関係性も吟味していく必要があるだろう。

ここまでに述べた成果と課題を引き継ぎながら、コミュニティ・メディアの実践研究を展開していきたい。そこでは、「活動・メディア実践コミュニティ・地域社会」から成る図 4.2.1 の枠組みを活用しつつ、地域社会の人びととともに学び合う「デザイン」の視座について更に考察していきたいと考えている。

註

1. 図 2.1.1 には Google Scholar を、図 2.1.2 には CiNii を利用している。前者は、各用語が「フレーズ」としてタイトルに採用されているものとし、「Community, Media, Society」などは除外している。また、「citizens' media」には、citizens media、citizen media、civic media も含めている。後者では、2005 年の「コミュニティ・メディア」には専門誌『地域開発』（通巻 493 号、日本地開発センター）の特集記事「特集 地域とコミュニティメディア」が 11 本検索されたため、これらは 1 本として加算している。最終アクセス日は、どちらも 2020 年 1 月 21 日である。
2. オルタナティブ・メディア研究に関する理論体系については、藤原（2017）を参照されたい。
3. 日本の「市民メディア」研究に対する批判的考察は、鳥海（2013：37-69）を参照されたい。
4. 報道ドキュメント「東電テレビ会議 49 時間の記録」（NPO 法人 OurPlanetTV 製作、2013 年、206 分）
5. Alternative Media 研究を代表する Radical Media（Downing, 2000）や Alternative Media（Atton, 2001）等は、いずれもこの視点を共有しているといえるだろう。
6. これは民芸運動に限らず、1920 年代のその他の農民芸術運動にもいえることである（鳥海 , 2013：71-105）。
7. 「民芸店ましこ」の店主、中村隼男氏へのインタビューによる（2005 年 10 月 21 日）。
8. 神奈川県藤沢市を拠点に活動した「湘南市民テレビ局」である。高校生からシニアまでのメンバー 10 名前後とともに、映像作品の制作・上映・配信活動などをおこなっていた。
9. 図 2.1.1、2.1.2 と同様に検索した。最終アクセス日は、2020 年 1 月 25 日である。

参考文献

- Atton, Chris（2001）*Alternative Media: Culture, Representation and Identity*. London: Sage Publications Ltd.
- Ball-Rokeach, S. J., Kim, Y.C., & Matei, S.（2001）"Storytelling neighborhood: Paths to belonging in diverse urban environments". *Communication Research*. 28（4）, 392-428.
- Coban, Baris ed.（2015）*Social Media and Social Movements: The Transformation of Communication Patterns*. Lexington Books.
- デューイ，ジョン（1934=2003）河村望訳『経験としての芸術（デューイ＝ミード著作集第 12 巻）』人間の科学新社
- Downing, D. H. John（2000）*Radical Media: Rebellious Communication and Social Movement*. Sage Publications, Inc.
- 藤原広美（2017）『デジタル時代のオルタナティブ・メディアの理論体系の構築および有効性の実証研究－米国新興デジタル・ニュース・メディアの実践を手がかりに』立命館大学大学院社会学研究科（博士学位論文）
- Howley, Kevin ed.（2009）*Understanding Community Media*. Sage Publications, Inc.
- Kenix, L. Jean.（2011）*Alternative and Mainstream Media: The Converging Spectrum*. London: Bloomsbury Academic.
- Kim, Y., Matsaganis, M., Wilkin, H., & Jung, J. ed.（2018）*The Communication Ecology of 21st Century Urban Communities*. New York, NY: Peter Lang.
- 粉川哲夫編（1983）『これが「自由ラジオ」だ』晶文社
- 児島和人・宮崎寿子（1998）『表現する市民たち―地域からの映像発信』日本放送出版協会
- 松本恭幸（2016）『コミュニティメディアの新展開：東日本大震災で果たした役割をめぐって』学文社
- Mckay, GA（2009）Community Arts and Music, Community Media: Cultural Politics and Policy in Britain since the 1960s. Howley, Kevin ed. *Understanding Community Media*, Sage Pblications, Inc., pp. 41-52.
- 水越伸・吉見俊哉編（2003）『メディア・プラクティス―媒体を創って世界を変える』せりか書房
- 水越伸・東京大学情報学環メルプロジェクト編（2009）『メディアリテラシー・ワークショップ―情報社会を学ぶ・遊ぶ・表現する』東京大学出版会
- 水越伸（2011）「批判的メディア実践と文化プログラムのデザイン」『人工知能学会誌』26 巻 5 号、pp.432-439
- モラン，エドガール（1967=1975）宇波彰訳『プロデメの変貌―フランスのコミューン』法政大学出版局
- Rodriguez, Clemencia（2001）*Fissures in the Mediascape: An International Study of Citizens' Media*. Cresskill, NJ: Hampton Press.
- 災害とコミュニティラジオ研究会編（2014）『小さなラジオ局とコミュニティの再生：3.11 から 962 日の記録』大隅書店
- 清水裕子（1973）『益子焼－やきものの里』三一書房
- 鳥海希世子（2013）『市民メディア・デザイン－デジタル社会の民衆芸術をめぐる実践的メディア論』東京大学大学院学際情報学府（博士学位論文）
- 津田正夫・平塚千尋編（2006）『新版 パブリック・アクセスを学ぶ人のために』世界思想社
- 鶴見俊輔（1967）『限界芸術論』勁草書房
- Waugh, Thomas, Baker, Brendan Michael & Winton, Ezra ed.（2010）*Challenge for Change: Activist Documentary at the National Film Board of Canada*. McGill Queens University.
- ウェンガー，エティエンヌ、マクダーモット，リチャード、スナイダー，M. ウィリアム（2002=2002）櫻井裕子訳『コミュニティ・オブ・プラクティス―ナレッジ社会の新たな知識形態の実践』翔泳社
- 柳宗悦（1982）「民芸の流行」『柳宗悦著作集』第 10 巻、pp.454-457（初出は「民芸の流行」『ホーム・ライフ』第 2 巻第 11 号、大阪毎日新聞社、1936 年）
- 萬木康博（1997）「濱田庄司と益子の「手仕事集団」をめぐって―燃えつづけた工芸家村構想」萬木康博、長田謙一監修『イギリス工芸運動と濱田庄司』イギリス工芸運動と濱田庄司展実行委員会、pp.144-146

鳥海　希世子（とりうみ・きよこ）

［**生年月**］1981 年 7 月
［**出身大学または最終学歴**］慶應義塾大学卒業、東京大学大学院学際情報学府博士課程修了
［**専攻領域**］メディア・コミュニケーション研究
［**主たる著書・論文**］
「「合評」としてのワークショップ」『日本バーチャルリアリティ学会誌』24（2）、pp.33-36（2019 年）
「「オイソラ」連中が語り始めるとき－戦後農村サークルにみる市民メディア･デザインの考察」『デザイン学研究』特集号 17 巻 4 号通巻 68 号、pp.28-37（2011 年）
「「あいうえお画文」ワークショップ－地域における協働的物語りの創出をめぐる実践的メディア研究」『社会情報学研究』14 巻 2 号、pp.155-169（2010 年）
［**所属**］東京大学大学院情報学環・特任助教
［**所属学会**］日本マス・コミュニケーション学会など

A New Perspective of Practice-based Research for Community Media: With Folk Art, Design and Local Society as Keywords

Kiyoko Toriumi*

The aim of this study is to propose practice-based research to previous studies which basically have been research, theory and historical research in community media. This paper consists of three parts. The first part reviews the changes in terminologies such as community media, alternative media, citizens' media and participatory media. This part also classifies previous literature's perspectives into three groups: activism, localism, and amateurism. The second part then examines the philosophy and practice of *Mingei* (Japanese folk art) movement to reinforce the debate on the amateurism. This part also illustrates the framework for the creation of *Mingei* in the context of community media. The final part proposes the perspective of "design" which uses practice-based research as a methodology while comprehensively taking over the previous research by activism, localism and amateurism. This paper concludes with proposing the design framework for practice-based research consisting of activity, community of media practice and local society.

* Interfaculty Initiative in Information Studies, The University of Tokyo

Key Words：Community Media, Folk Art, Design, Local Society, Practice-based Research